さくらサイエンスクラブ日本同窓会 開催

日本におけるキャリア形成の経験を共有

科学技術振興機構（ＪＳＴ）が２０１４年から行っている「さくらサイエンスプログラム」（ＳＳＰ）では、昨年度までに既に94カ国・地域から４万４０００人超の若者を日本に招へいし、４００機関にのぼる日本の大学、高専、高校等における国際交流が行われている。各国・地域からの招へい者はほぼ全員、招へい後に「さくらサイエンスクラブ」（ＳＳＣ）と呼ばれる同窓会組織に参加し、継続的なネットワークを構成するとともに各国・地域において自主的な活動等を実施している。

このＳＳＣメンバーのうち、日本に留学・研究・就職等（観光除く）の目的で再来日し長期滞在した者は、２０２６年３月までに３０００人超にのぼっている。このような再来日者のうち、現在日本で活躍するＳＳＣメンバーの有志を中心として、９月12日にＳＳＣ日本同窓会がオンライン開催された＝**写真**。同窓会は、「さくらから成功へ」と題し、同窓生が自身の経験や学びを共有した。

同窓会は、新幹事長のサヒル・ディウェディ氏（インド・２０１５年度ハイスクールプログラム参加）とＪＳＴさくらサイエンスプログラム推進本部の伊藤宗太郎副本部長による開会挨拶で始まった。サヒル氏は、同窓会の活動がＳＳＣメンバー同士の交流や相互支援を促進するネットワークとして重要な役割を果たしていると説明。参加者に本コミュニティを積極的に活用するよう呼びかけた。

また、同窓会の提供するさくらメンターシステムについて紹介が行われた。さくらメンターシステムは、日本留学、就職、研究等に関心のあるＳＳＣメンバーが個別に相談できる仕組みで、メンターは様々な経歴を持つ日本在住のメンバー７名が務めている。メンターは、来日までの経験や日本での苦労など様々な観点から書かれたコラムも提供している。伊藤副本部長からは、ＪＳＴが昨年より開始したＳＳＣメンバー対象の奨学金推薦枠について紹介があった。ぜひ良き機会と捉え、積極的な応募をしてほしいと呼びかけた。

続いて、日本在住の２名の同窓生が登壇した。両名とも、現在は企業とアカデミアで職についており、ＳＳＰがきっかけとなり、日本に留学したこと、そこからの学び、現在に至るまでの経験が共有された。留学から、研究または就職等日本でキャリア形成をするためには、長期的な視点が重要であること、指導教官や先輩との繋がりが、進学・就職に大きく寄与したことなどが述べられた。

パネルセッションでは、日本留学と日本就職のセクションに分けて様々な観点から議論が行われた。特に日本留学については、教授へのコンタクト方法、奨学金、在学時のアルバイト、日本での生活などがアドバイスを交えながら知見の共有があった。一方、日本就職については、企業とアカデミアにおいて、流れの違いなどにも触れながら紹介があった。

当日は、参加者の６割以上が高校生を含む学生だったため、日本留学の実現方法、奨学金等に関する質問が大半を占めた。特にＭＥＸＴ奨学金を中心とする奨学金情報への関心が高く、留学や就職に際し、必要とされる日本語能力等についても質問が寄せられた。

参加者アンケートでは、回答者の９割以上が「素晴らしい」もしくは「よかった」と回答した。また「本イベントは日本留学就職のモチベーションをあげましたか」との設問には、９割以上が「大変効果的であった」、もしくは「ある程度効果的であった」と回答した。

多くの学びがあったことへの感謝の声や、参加者同士が交流を深めるためのネットワーキング時間を望む声などがあり、次年度以降へより一層の期待が寄せられた。